

2025-2026 フィンドレー大学・福井県奨学生月例報告書 1月

作成者：伊藤桜羽

作成日：2026年2月9日

新年を迎えたオハイオ州では、気温が氷点下 15 度を下回る日が当たり前となり、厳しい寒さが日常生活の前提として存在しています。朝、家を出た瞬間に感じる刺すような冷気や、息が白く凍る感覚は、日本で経験してきた冬とは大きく異なり、季節そのものが生活に与える影響の大きさを強く実感させられます。降雪や路面凍結により移動に注意が必要な日も多く、厚手の防寒具や時間配分など、寒さを前提とした行動が求められる毎日です。そのような環境の中で、体調管理に留意しながら学業に取り組むと同時に、自信の生活習慣や考えかとお見直す機会も増えました。本報告書では、こうした厳しい冬を背景に過ごした 1 月の留学生活について、学習面および生活面を中心にご報告いたします。

【学習面】

学部生として新しい学期がスタートし、今学期は General Psychology、Principles of Marketing、Communicative Practices、Communities and Societies、Topics in Marketing; Community-Based Organizations Operations, Innovations, and Communications、そして前期から引き続き Choir を履修しています。今学期は学部の中でも比較的レベルの高い授業を選択しているため、学期始まる前は、英語で専門的な内容を理解し、議論や話題についていけるのかという不安でいっぱいでした。特に、専門用語が多く使用される分野において、自分の語彙力や理解力が十分であるのかについて、強い心理的負担を感じていました。

しかし、実際に授業が始まってみると、教授のサポート体制は想像以上に手厚く、質問や相談がしやすい雰囲気が整っていることに気づきました。また、これまでの留学生活の中で少しずつ身に付けてきたリスニング力のおかげで、「全く理解できない」という状況に陥ることはありませんでした。そのため、学期開始前に抱いていた強い不安は徐々に和らぎ、現在は一定の手応えを感じながら授業に臨んでいます。

一方で、心理学およびマーケティングの授業においては、専門用語の多さが大きな課題となっています。用語そのものの意味を理解するだけでなく、その背景にある理論や前提条件、実際の社会やビジネスの場面でどのように応用されているのかまで把握する必要があり、表面的な理解では不十分ではあると感じています。そのため、授業前には資料を読み込み、重要な概念や用語を整理する予習を行い、授業後にはノートやスライドを見直しながら内容を再確認する復習を欠かさないう心掛けています。現時点では、「予習と復習に勝る近道はない」という意識が、学修の基盤となっています。

また、今学期はディスカッションを重視する授業が多く、受け身の姿勢では学習成果を十分に得ることができない環境に置かれていると感じています。自分の考えをその場で整理し、英語で論理的に発言する力が求められるため、内容理解に加えて、発言の準備も重要となり

ます。特に、最終課題として設定されているグループワークでは、個々の学生の貢献度が成果に直結するため、人一倍の準備を怠れば、グループ全体に悪影響を及ぼしかねないという責任感を強く意識するようになりました。

マーケティング関連の授業については、日本で学んできた内容と共通する理論的枠組みが多く見られる一方で、アメリカならではの視点や実践的要素が多く取り入れられている点が印象的です。例えば、実在する企業や非営利団体を題材としたケーススタディ頻繁に用いられ、単なる理論理解にとどまらず、地域社会や社会課題との関係性を踏まえた分析が求められます。このような授業を通して、日本とアメリカにおけるマーケティングの考え方や価値観の違いを具体的に認識することができ、自身の視野が拡張されていると感じています。

中でも特に印象に残っているのは、Topics in Marketing; Community-Based Organizations Operations, Innovations, and Communications の授業において実施した、非営利団体に関する Marketplace Research のプレゼンテーションです。前学期にも発表の経験はありましたが、今回は学部生向けの授業向けの授業でありながら内容の専門性が高く、扱うテーマも社会性の強いものであったため、準備段階から大きな困難を感じました。伝えたい内容を英語で的確に表現することの難しさに直面し、語彙選択や構成について何度も見直しを行いました。

このプレゼンテーション準備において、大きな支えとなったのが ELL(English Language Learner)Support Center の存在です。このセンターでは、プレゼンテーションの資料の構成、文章表現の精緻化、さらには発表練習まで、段階的かつ丁寧なサポートを受けることができました。常駐している大学院生の方々は、学習面だけでなく精神面にも配慮してくださり、「一人で抱え込まず、周囲の力を借りて良い」という安心感を得ることができました。また、ELL Support Center には、日本語専攻の学生や日本語に興味を持つ学生も訪れるため、課題に取り組む合間にアニメや日本文化について話す機会もあります。この場所は単なる学習支援の場にとどまらず、雑談や悩み相談が活発に行われる交流の場でもあり、留学生が集まりやすい環境であると感じています。学習面と生活面の双方において、今学期を乗り越える上で欠かせない拠点となっています。

さらに、Communities and Societies の授業では、コミュニティや社会構造について多角的に考察する中で、自分自身の立場やアイデンティティについて深く向き合う機会を得ました。留学生として異文化の中で生活する自分、日本人としての価値観や背景を改めて言語化することで、自身のアイデンティティを再構築している感覚があります。この授業は、学問的な学びに加えて内省的な学びを促す非常に意義深い授業であると感じています。

また、履修登録期間中には一度だけダンスの授業に参加し、人生で初めてタップダンスを経験しました。Shuffle, Ball Chage, Flap, Cramp Roll, Time Step などのように、ステップの種類が非常に多く、短時間で習得することは難しかったです。しかし、慣れない動きに戸惑

いながらも、新しい表現方法に挑戦する楽しさを感じました。同時に、以前 Pittsburgh でのミュージカルの中で見た、プロとして活動するダンサーの高度な技術と努力に対する尊敬の念が強まり、自分自身の学びに対する姿勢を見直すきっかけにもなりました。

【生活面】

年末年始には、日本人の方々や、私たちと日頃から関わりのある学生たち、そしてフィンドレーに駐在している方々と一緒に、年越しパーティーと新年会を開きました。海外で迎える年越しは少し不安もありましたが、皆さんと温かい時間を共有できたことで、日本にいる時と同じような安心感を味わうことができました。特に印象的だったのは、年越しそばを食べられたことです。今年は無理かもしれないと半ば諦めていたので、実際にそばを囲んで年越しの瞬間を迎えられた時は、本当に嬉しくて胸がいっぱいになりました。その他にも日本食をたくさん堪能することができ、異国の地で日本の味に触れられる幸せを改めて感じました。

また、「年越しの瞬間に家の周りをフライパンで叩いて回ろう！」という現地人の友人の発言から、みんなで外に出て賑やかにフライパンを叩きながら新年を迎えました。調べてみると、これは古い民間伝承で、大きな音を立てて悪いものを追い払い、新しい年の幸運を呼び込むという意味があるそうです。日本の除夜の鐘とはまた違った形で「年を越す」という文化に触れられ、とても興味深い経験でした。

寒い夜にみんなで笑いながら騒いだあの時間は、留学生活の中でも特に心に残る思い出のひとつになりました。異文化の中で過ごす年末年始は不安もありましたが、人とのつながりや温かさに支えられ、忘れられない新年を迎えることができました。



1月26日および27日、オハイオ州フィンドレーでは大学が休校となりました。今回の休校は大雪による道路状況のみを理由としたものではなく、極端な低温や体感温度の低下による健康リスク、路面凍結の可能性、今後の悪天候の予測などを総合的に考慮した判断でした。私にとっては留学生活の中で初めての休校経験であり、大学からの公式アナウンスを目にした際は大きな驚きを感じました。日本では警報が発令されても授業が通常通り行われる場合が多いため、学生の安全を最優先し、早い段階で休校判断が下される点に、アメリカ

の危機管理意識の高さを感じました。特に、地元である福井県と比較すると、「この程度の雪であれば福井では問題なく生活できるのではないか」と感じる場面もあり、地域ごとの気候条件や雪への慣れ、判断基準の違いを強く実感しました。この経験を通して、同じ自然現象であっても、地域や文化によって受け止め方が大きく異なることを改めて認識しました。

休耕期間中は、授業がない分、自宅で課題に取り組んだり、普段よりも自炊をしたりと、普段とは異なる時間の使い方をすることができました。静かな環境の中で、自分自身の生活リズムや学習習慣を見直す貴重な機会にもなりました。

As of [1:00 p.m.](#), Hancock County is still under a Level 3 Snow Emergency, and we are expecting high winds and low temperatures throughout the night.

Campus will remain **CLOSED for the remainder of the day and [Tuesday, 1/27/26](#)**. All activities are canceled.

Please assume that normal operations will resume [on Wednesday, January 28, 2026](#). If that changes, further communication will be shared (See below).



また、地域との関りを実感できた経験として、MAZZA MUSEUM で開催された「Funday Sunday」のイベントに参加しました。Funday Sunday は、子どもや家族連れを主な対象とした地域参加型イベントで、美術館の展示鑑賞に加え、さまざまな体験型アクティビティを通して学びと交流を促すことを目的としています。私が参加した回では、アメリカ建国 250 周年（America 250）を意識した内容がテーマとなっており、アメリカンフラッグを連想させる色彩やモチーフを取り入れた企画が多く見られました。

私は日本文化を紹介するブースを担当し、来場者に向けて折り紙で星を折る方法を教えました。星というモチーフは、今回のテーマやアメリカ国旗とも親和性が高く、日本の伝統文化である折り紙を紹介しながら、イベント全体の趣旨にも自然に沿った形で活動することができました。一方で、折り紙を教える過程では、「山折り」「谷折り」「折り返す」といった折り紙特有の動作を英語でどのように伝えるかに苦戦しました。これらの表現は日本語では専門用語として定着していますが、英語では必ずしも一般的ではなく、特に子ども向けのイベントでは理解しやすい言い換えが求められます。そのため、mountain fold や valley fold といった用語を用いるだけでなく、「自分の方に折る」「向こう側に折る」といった動作を示す説明を加え、実際に手本を見せながら伝える工夫が必要でした。完成した星を手にした子どもたちが嬉しそうな表情を見せてくれたり、「日本には他にどんな折り紙があるのか」と質問してくれたりしたことが特に印象に残っています。この経験を通して、単なる言語の翻訳ではなく、文化や文脈を踏まえた伝え方の重要性を実感しました。また、大学内にとどまらず、地域社会と関わる活動に参加することで、自身の文化的背景が強みとして活かされる場面が多くあることを改めて認識しました。



日本の成人式に出席できないことに対しては、当初より寂しさや心残りを感じていました。しかし、その思いは予想外の形で温かく満たされました。こちらで交流のある日本人の方々をはじめ、地域の方々やフィンドレーに駐在している方々が、実際の誕生日はまだ先ですが、成人の日として私の成人を心から祝ってくださったのです。異国の地で「成人おめでとう」と声をかけていただけるとは思っていなかったため、大きな驚きとともに深い感動を覚えました。特に印象的だったのは、母国語が日本語ではない方々までが、日本語で「おめでとう」と伝えてくださったことです。不慣れた発音でありながらも、心を込めて祝ってくださる姿に、文化や言語の違いを超えた温かいつながりを強く実感しました。日本の成人式に参加できなかった寂しさよりも、ここで祝っていただけた喜びの方が大きく、忘れがたい節目となりました。

また、この日は日本の正月文化を共有する機会として、参加者全員で餅をこねて食べる活動も行いました。みんなで餅をこねる時間は非常に和やかで、出来立ての温かい餅をきなこや醤油で味わった瞬間には、日本の正月の記憶が鮮明によみがえりました。日本人だけでなく、アメリカの方々も興味を持って参加し、「このように餅を作るのか」と楽しそうに話していたことが印象深かったです。文化の異なる人々が同じ作業を通して交流し、同じ食を共有することは、言語以上に人と人を近づける力があると感じました。この一日は、単なる成人のお祝いにとどまらず、異文化環境の中で支えてくださる人々の温かさや、文化交流の意義を深く実感する特別な経験となりました。



日常生活で特に印象的だった出来事として、コモンスペースで課題に取り組んでいた際、特別な繋がりやなかった現地学生3名からカードゲームに誘われた経験があります。留学生活

の中で、日本語専攻の学生やハウスメイトといった既存の人間関係以外から自然に声をかけられたのは初めてのことでありませんでしたが、数えるほどしかないとても貴重なことだったので、「留学生」という枠を超えて、一人の学生として受け入れられているのではないかと感じ、強い喜びと安心感を覚えました。

交流を深める中で、彼らが全員1年生でありながら Campus Ministry として活動しており、将来についても明確な展望を持っていることを知りました。その姿勢に強い刺激を受け、自分自身も将来をより具体的に見据えて行動する必要があると感じました。そのうちの一人は乗馬専攻で、5月頃に北海道の酪農学園大学へ約2週間留学する予定があり、日本について詳しく知りたいと話してくれました。思いがけない形で日本との繋がりが生まれたことに、驚きと同時に大きな喜びを感じました。

その日は1時間半ほどにわたってカードゲームを楽しみ、会話の中で大学から少し離れた場所にあるクレープ店の話題になり、翌日一緒に行く約束をしました。このように、気軽に行動を共にできる関係性は非常に新鮮であり、文化交流という枠を超えて、対等な立場で人と繋がれていると感じられる貴重な経験となりました。

その後も、その学生たちとはキャンパス内で会う度に長く立ち話をしたり、頻繁に遊びに誘ってもらったりする関係が続いています。多くの学生との関係があいさつ程度で終わる中で、このように継続的な交流が生まれていることは、私の留学生活において大きな支えとなっています。



以上の経験を通して、異文化交流における学習と生活の両立の厳しさと同時に、自身の適応力や成長を実感することができました。留学生活も残り約3か月となりましたが、限られた時間だからこそ、一つ一つの出会いや経験を大切にし、学習面・生活面の双方において悔いの残らないように過ごしていきたいと考えています。

本報告書についてご質問、お問い合わせ等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡ください。

itos1@findlay.edu